

観光と遺跡

「観光」という言葉から皆さんが思い浮かべるイメージはどのようなものでしょうか。日常生活から離れて解放的な気分の下で遊覧を楽しむ、といったイメージの方も多いのではないのでしょうか。観光研究者の最大公約数的な定義は、堅苦しい表現ですが「通常居住地域を一時的に離れ、非日常的で好ましい空間と時間を消費（享受）すること」といったところです。蛇足ながら、こうした空間と時間の消費が観光者（「観光客」）自身の活力再生産の源になることは言うまでもありません。

ところで、観光地は、それ自体が観光の対象となる「観光資源」だけでは成立しません。魅力的な観光地であるためには、優れた観光資源の存在とともに、交通機関も含めた観光資源を利用するための良好な「観光施設」の存在が不可欠です。俗にアゴ（食事）アシ（交通）マクラ（宿泊）といわれますが（実はその前にイノチ（治安）がある）、交通の便が悪くなく、良好な宿泊施設と飲食施設が備わり、かつそれらの施設におけるサービスが適正な対価で提供されることが必要というわけです。

遺跡は観光資源としての資質を備えています。遺跡は現在から時間的に隔たった空間を残す場所であり、そうした意味で非日常的な空間であるからです。したがって、遺跡を観光資源として活用するという

アイデアは決して的外れではありません。もちろん、そのためには遺跡保存の措置ならびに観光者との良好な関係を取り結ぶ仕掛けが必要であり、遺跡保存整備がそうした役割を担うことになります。もちろん、遺跡を保存整備すれば、観光資源となりうるということではありません。個々の遺跡の観光資源としての資質が大きく関係するからです。また、観光資源とはなりえても地域が観光地として立ち行くとも限りません。観光資源として単独で魅力的な遺跡はきわめて少ないし、良好な観光地であるためには良好な観光施設も不可欠な要素であるからです。

遺跡研究室で昨年からおこなっている大規模遺跡の整備・管理・活用に関する研究では、こうした観光と遺跡の関係という視点も含めたアプローチをおこなっているところです。

(文化遺産研究部 小野健吉)



白水阿弥陀堂(福島県いわき市)

園池を発掘・整備し、観光資源的価値を増進